

I (配点 90 点) 出典：樋口桂子『メトニミーの近代』

17 世紀ヨーロッパにおける「まとまりへの強い性向」の背後に、著者は、「見せかけのしくむ調和の快」を見る。問題文は、それを動物寓話のイロニーをとおして検討した箇所にあたる。

問題文は、段落内容や段落と段落のつながりが明確で、使用されている語句も平易であり、検討も具体的に行われているため、内容はつかみやすかったのではないと思われる。そのぶん、問七 (a) のように抽象的なレベルでの説明が難しかったようである。

問一 A 負(う) B 卑下 C 誇張 D 垂(れ) E 暴露(曝露)

文脈にそくした漢字が書けるかどうかを問う問題。E の誤答で「曝露」が多かった。

問二 著者の思考の前提を問う問題。傍線部「快い」が数行前の「調和の快」、さらに一行目の「居心地の悪さ」といった表現とつながっていることに気がつけば、冒頭箇所をまとめればよいことが分かったと思われる。ただし、傍線部に「戯れ」とあるように、たんに人びとがそれを「快」として楽しんだだけでなく、それをふまえて提供する側もあり、両者の交錯のうえに「謎」が予定調和的に成立しているというところまで説明を求めている。

問三 p.2 の終わり 2 行、「彼の徳育の手法は、見せかけによって隠された真実を描き出すという点で、一七世紀の寓話の手法と同一のイロニーの機能に負っている」と著者自身が説明していることに気づけば、解答は容易であったと思われる。

問四 「修辞」の観点から説明を求めているが、次段落冒頭で「イロニーとは～古典的な修辞手段のひとつである」とあり、また、同段落末尾に「～によって、イロニーの修辞を実現して行くのである」ともあることに気がつけば、「見かけ」をイロニーの観点から説明するということが分かったと思われる。対立する二項を対比的に配置することで表層の見せかけをとおして裏面を読む、というしくみをふまえて解答する。同段落冒頭の「前者によって後者をあらわす」の箇所をそのまま用いた解答が多かったが、対立概念の対比的な配置が説明されたうえでの「前者」「後者」なのであり、その説明がなければ「前者」「後者」が何なのかが、解答上、明らかではない。解答は、それを読んだだけで分かるように説明されていなければならない。

問五 「イソップその人のどのような点に」と聞いているのだから、「つくり手と受け手の支配・被支配という逆説的な関係」だけでなく、もう一つ、「専制君主制と民主主義という二つの制度の対比」もふまえて解答しなければならない。どちらか一つという解答が多かった。

なお、著者は、イソップの出自や「運命」にもイロニーの対比構造を読んでいるわけで、その意味で問三・四と大きく関わっている問いでもある。単にイソップがそうであったというだけでなく、それがイロニーとどう関わっているかというところまで読んでほしい。

問六 問四との類似問題ではあるが、「セミとアリの寓話」を例に、「イロニーの一七世紀は」段落と次段落をふまえた解答を求めている。「セミとアリの寓話」における教訓が何であるかを問うているのではなく、「表と裏の関係」がいかにして際立ち、なにゆえ「調停される時の快」が強くなるのかを問うている。したがって、p.4の三段落目、「動物が人間の対極にあるとみなされていればこそ、動物と人間との類似性の発見は、調和の快を強め、物語の演出力を高める」ことをふまえて解答すればよい。

問七 (a) 問六において「イロニーの十七世紀は」の段落内容とその次の「イロニーを本質とする寓話が」の段落内容をふまえ、「二項がお互いに異質だったから」こそ「二項の共通要素の発見が人を喜ばせ快を生む」という「類似」と「相違」の表裏一体の関係をふまえて解答すればよい。

(b) 二重傍線部冒頭「一七世紀のパラドックスへの傾き」とあることから本問題文冒頭と対応していることに気がつけば、「一七世紀のパラドックスへの傾き」は「まどまりへの強い性向」、そして「異質者同士の中に共通項を取り出して、調和を見出すことを優先する時代」という背景が見えたかと思われる。では、そうした時代を支えていたイロニーとはどういうものであったか、ということをつまえて解答することを求めた。問三から問六までにおいて「イロニー」の機能が理解できているかどうかを再確認する問題でもある。

II (配点 60 点) 出典：(不詳)『さかへいやます物語』

平安時代前期の藤原良門の息子、高藤と宮道弥益(みやじのいやます)の女(むすめ)との出逢いと結婚を端緒とする京都勸修寺の創建を物語る縁起譚である。『今昔物語集』にも

ほぼ同内容の話が見える。都の郊外での偶然の出会い、一夜での懐妊、待ち続ける女、探し出した末の再会等、古代の聖婚を思わせる要素に満ちた話である。前半はある程度、筋が追いやすが、後半になるにつれて筋が取りにくくなる。特に二人が結ばれたあとの筋を正確に捉えることがポイントである。

問一 基本的な古語についての知識を問う問題。基本単語を正確に覚えて、3問全て正解することが望ましい。**A**は「とばかり」を「暫時」の意で、**B**は「たのむ」を下二段活用の「あてにさせる」の意で、**C**は「ねぶ」を「大人びる」の意でとらえる。

問二 前半の筋と人間関係が整理できているかを問う問題。

(a)は、父良門が、息子の高藤に、鷹狩りに出かけることを禁じたということを簡潔に記す。

(b)は、高藤が行方不明になって周囲の者に非常に心配をかけたことを書けばよい。「あやしきおぼつかなさ」の部分の「あやし」に過剰に意味を読み取って解釈した解答が目立った。知っている単語に飛びついて文脈から外れた解釈をすることのないよう、注意してほしい。

問三 中盤の筋と人間関係が整理できているかを問う問題。「申す」とあるから、①下位の人物である馬飼いから、②上位の人物である高藤に対して、③かつて鷹狩りに行ったとき雨宿りした家の場所を覚えていると言った、という3点が書ければよい。高藤と女との出会いの場面について詳しく記述する必要はない。おおむねよく出来ていた。

問四 待ち続けた末、再会することがかなった女の心情を問う問題。物も言わず涙をあふれさせているわけだから、会えない間の悲しさ辛さを表していることはもちろんだが、再会の場面ということを考慮すると、ようやく会えた喜び、嬉しさを表しているところまで記述できているとよい。なお、この時点で、すでに筋を取りきれず、女が別の男と結婚し出産までしていたと解釈する解答が一定数あった。これは全く点数が出ない。

問五 同格の助詞「の」、……連体形、を、正確に理解して訳出できているかどうかで、点数に差が出た。句の順序を勝手に替えて訳出した場合、減点の対象となる。

問六 易しい語ばかりだが、ここまでの総合的な読解力によって差が出た問題。また敬語「奉る」や「給ふ」についての理解も問われている。理想を言えば、ここまでの問題をクリアできていることが望ましい。

問七 どちらも、記述したいが十分にできていない解答が多く、正答率は低かった。

(a) は、「留め置きたりし」とあることに注意すれば、高藤が女のもとに「形見に留め置」いた太刀だということがわかるはず。霜は、白く光ることから、太刀の譬喩表現である。

(b) は、本文全体を踏まえて、たった一夜の出逢いではあったが、その後も女が心変わりすることなく高藤を一心に待ち続けたということを押さえる。

III (配点 50 点) 出典：〔宋〕陸游『老学庵筆記』

著名な画家・李伯時（李公麟）の作とされる観音像の多くが、実は趙広の筆になることを記した一文である。——李伯時のそばに仕えていた趙広は、絵画の腕を上げ、馬の絵を最も得意とした。建炎年間、攻め込んできた異民族の軍隊に捕まった趙広は、捕らわれていた女性の絵を描くよう命じられるが、断固として応じない。賊軍は趙広の右手の親指を切り落としたが、実は、趙広の利き手は左手だった。戦乱が収束すると、趙広は観音菩薩ばかりを描くようになった。今、李伯時の描いた観音として士大夫が珍重している絵は、実はその多くが趙広の作である。——趙広が李公麟作と誤認されるほどの観音像を多数描くことになった経緯が、時間軸に沿って簡潔に述べられているので、主語を取り違えないようにして、丁寧に筋を追ってほしい。

問一 基本的な読みの問題。a 「つねに」、b 「つひに」、c 「のみ」。いずれも基本的な語であり、比較的よくできていた。ただ、a には「ごとに」とする誤答が目立った。ここでの「毎」は、「つねに」と読み、「いつも」の意。

問二 書き下しの問題。「左右に侍（はべ）らしむ」。(李伯時は絵を描く時いつも趙広を)「そばに侍らせた」の意。「使」が使役の意であることは、ほぼ理解できていた。ただ、「左右をして」とする誤答が多かった。「使侍左右」は、「使A B (AヲシテBセシム)」のAが省略された形で、B(動詞)にあたるのが「侍」。Aが直前にあって自明の場合には、省略されることもある。語順に注意すること。

問三 内容把握の問題。「幾能乱真」とは「ほとんど本物と見紛うほどであった」という意味。この文脈では、趙広の描いた馬の絵が「李伯時の馬の絵と見分けがつかないほど似ていた／上手だった」ともとれるし、「本物の馬であるかと思えるほど上手だった」ともとれる。両方とも正解とした。

問四 現代語訳の問題。「本当は絵を描くことができないのだと言って断った」。主語は、趙広。女性の絵を描かせようとする賊軍に対し、「実は描けない」ことを理由にして（うそをついて）拒絶したことが分かるように訳されていればよい。

問五 内容把握の問題。「趙広は刃物で脅かされても断固として描くことを承諾しないので、（怒りのあまり）、（利き手であろう右手の親指を切断して）本当に二度と絵が描けないようにしてやろうと思ったから」ということが書けていればよい。

問六 内容把握の問題。肝心なのは、「現在、李伯時の作であるとされている観音像の多くが、実は趙広を描いたものであったこと」である。この点を押さえたうえで、趙広は乱後に左手で多くの観音菩薩の絵を描いたこと、趙広の描いた観音像は李伯時の作に劣らない出来であったこと等を加えてもよい。本文から読み取れない「教訓」が加わっている場合は減点した。